Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

特集紹介 : 特集 家の現在（特集 家の現在）

平井, 晶子

(Citation)
社会学雑誌,26:1-2

(Issue Date)
2009-09-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011093

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011093

KOBE UNIVERSITY

特集　家の現在

平井晶子

今号の特集「家の現在」では、変化が著しいと言われて久しい家族について、何が変化し、何が変化していないのかを考えるひとつの手だてとして、家という視点から四本の論文をご寄稿いただいた。いずれの論文も現在の調査結果をもとに議論が深められており、過去の問題としてではなく、現在のアクチュアルな問題として家が捉えられている。

なぜ、二一世紀の現在において、家を論じる必要があるのか。ながらく家族社会学では、戦後の家族を「直系家族制（家）から夫婦家族制へ」という変化として理解してきた（森岡、一九九三）。戦後の家族は順次民主化し、その結果、新たに結婚する夫婦は自分たちの世帯を創設し、夫婦家族となる割合が高くなる、そして一九七〇年代以降、夫婦家族を規範とし、かつ夫婦家族を営む家族が過半数を超えた社会が到来したとみなしてきた。

しかし、その一方で直系家族世帯は根強く残っており、直系家族世帯そのものはあまり少なくなっていない（割合ではなく実数で見た場合）、というのも広く知られた事実である。このことを踏まえ人口学者伊藤達也は、戦後の核家族化は「多産少死世代」による見せかけの核家族化であると説明した（一九九四）。一九二五年から一九五〇年生まれ（昭和ヒトケタから団塊の世代）までが多産多死から少産少死への移行期世代であり、成人後のきょうだい数がもっとも多い。そのため直系家族を維持しつつ、家を継承しない子どもが都市へ移動し、大量の夫婦家族を形成したというのである。

戦後と一口にいっても六〇年以上が経過し、二世代、三世代と経てきた現在、その変化の内実は、どちらか一方が正しいという単純なものではなく、右のふたつの事態が同時に進行し、いろいろな矛盾や葛藤を抱えながら今日に至っているのではないだろうか。しかし、一九七〇年代以降、家族社会学では前者の認識が強くなり、夫婦家族をおもな分析対象としてきたため、家的側面についての分析が弱くなった。そのため、家を継承するという態度そのものが希薄になったのか、それとも家は継承しつつ、夫婦家族が増えたのか、だれが、どのように、どのタイミングで家を継承するのかなど、直系家族の内実はもちろんのこと、祖先観やお墓の継承など家族の家的側面の研究が十分に行

われてこなかった。本特集では、戦後の家族変動の忘れられた側面を深化させることをねらいとし、緻密な実証データに基づいた論考をご準備いただいた。

最初の論文は、気鋭の家族社会学者、加藤彰彦氏（明治大学）よる「直系家族の現在」である。継承という視点から、近年の全国規模の家族調査のデータを分析し、戦後一貫して直系家族が維持されていることを論証した。核家族化論に再考を促す、たいへん刺激的な論文である。

続いては、家や村をキー概念として、民俗学・歴史学・社会学の三者の融合を目ざす森本一彦氏（京都大学）による「家の民俗・歴史」である。近畿地方の二地域のフィールドワークから世帯や祖先祭祀の実態を明らかにし、家の現在の状況を明らかにすると共に、長期的視野から祖先観および家観念の歴史的変化の可能性を示している。

第三論文は、奥井亜紗子氏（日本学術振興会）による「農村跡嗣の都市移動と家の継承」である。「直系家族制から夫婦家族制へ」という家族変動論のなかで、われわれが理解したつもりになっている農村から都市への移動について、詳細な聞き取り調査を行い、移動の複雑なプロセス、複雑な心理が解き明かされる。家の解体であれ、継承であれ、戦後六〇年の変化を理解する上で欠かせない重要な視角からの分析である。

最後は、ケンブリッジ・グループの上級研究員として、故ピーター・ラスレット氏らとともに世界の家族史研究を牽引してきたリチャード・ウォール氏の「過去と現在における英国家族の世代関係」である。イングランドは伝統的に夫婦家族制社会であり、直系家族制の日本とは対極にあるが、日本の家族変動論の軸が「直系家族制から夫婦家族制へ」であるなら、典型的な夫婦家族制とはいかなるものなのかを具体的なレベルで理解しなければならない。そのため老親扶養や子どもへの援助など、世代関係の実証研究、とりわけ一七世紀以降の変化の有無を扱った論稿を本特集に組み込んだ。

日本についての三つの論考は、社会学的定量分析、インタビュー調査、民俗学的研究と方法は異なるものの、戦後の家の変化を考え、現在の複雑に絡まった家族を理解するには欠かせない重要な視座を与えてくれる。また、それらと合わせて英国夫婦家族の世代関係を読むことで、家族制度の変化を考える意味、もしくは家族変動を読み解く軸は何かなど、変動論そのもののありようを再考する機会になれば幸いである。

文献

伊藤達也『生活の中の人口学』古今書院、一九九四年
森岡清美『現代家族変動論』ミネルヴァ書房、一九九三年